

第2回 東北大学産婦人科腹腔鏡下手術トレーニングセミナー



東北大学病院婦人科 助手 渡 邊 善

急速な技術革新もあり、近年の内視鏡下手術の発展や普及には目を見張るものがあります。産婦人科領域においても、すでに腹腔鏡下手術は標準的な技術になっています。しかし、低侵襲性と同等に確実性、根治性、そして安全性を同時に求められるようになってきており、その華やかな手技の中に確かな知識と高度な技量が要求され、技術を習得するため、さらには進歩するためには日頃からの鍛錬が必要となります。

東北大学産婦人科では、腹腔鏡下手術トレーニングの一環として、県外施設にて年1回の「みちのく婦人科内視鏡セミナー」を開催し、実験動物を使用した Animal Wet Lab を行ってきました。一時期、開催を見送っておりましたが、平成25年9月、東北大学医学部敷地内に東北大学病院先端医療技術トレーニングセンターが開所したことを受けて、「東北大学産婦人科腹腔鏡下手術トレーニングセミナー」として新たに企画され、平成26年2月22日にその「第1回」が開催されました。

この度、平成26年9月6日に「第2回」となるセミナーを良陵協議会と日本産科婦人科内視鏡学会の主催、そして動物実験施設の共催のもと開催いたしました。今回はそのトレーニング内容についてご紹介したいと思います。



「第2回」セミナーは、良陵協議会の協力を得て、受講生の募集をしたところ、今回も東北大学病院内外から多くの申し込みがあり、選定の結果7人の産婦人科の先生にご参加頂きました。受講生の先生方には、朝8時30分から集合してもらい、動物実験施設の笠井教授と実験技官末田さんから動物実験に関する倫理と福祉について講義を受けた後、9時から直ぐに Dry Lab で肩慣らし、Wet Lab は11時から開始、途中昼食休憩を置いて、終了時間は夕方5時までという、ほぼ丸1日間腹腔鏡漬けになってもらいました。

Dry Lab では、基本的手技である結紮縫合を中心とした練習内容としました。開腹手術ではできて当然なのに腹腔鏡ではあたかも高等技術のように扱われてしまっている「縫合結紮」の手技。この Dry Lab では、「縫合結紮」が直視下で行うのと全く同じ原理で鏡視下でも難なくできてしまう

手技であることを実感すること、そしてもっと重要なことはその練習が空間認知や両鉗子の協調運動のトレーニングにもなり、実際の腹腔鏡下手術で必要となる空間把握・認識や体の使い方に繋がると理解することを目的としておりました。受講生には、Animal Wet Labの前の準備運動も兼ねて、その点を意識してもらい、短い時間ではありましたが、集中して取り組んでいただきました。



一般的に学会や医療機器メーカーが主催しているセミナーとは異なり、本セミナーのプログラムには、動物実験施設の全面的協力のもと実験動物の前処置から麻酔導入までの過程を見学する内容も盛り込みました。その狙いとして、参加者にも動物実験がいかに貴重なものなのかを理解して、



Animal Wet Labに取り組むことでトレーニング効率を高めることを見込んでいました。実際に受講生からも Animal Wet Labの前にモチベーションを上げることができたなどの意見を頂きました。

Animal Wet Labでは、前半のBasic編と後半のAdvanced編の2部構成としました。Basic編では、腹腔鏡の導入とDry Labで練習した縫合結紮のポイントを再確認することから各種パワーデバイスの特性を理解するところまでを、そしてAdvanced編では実際の手術でも起こりうる臓器損傷や出血などの際のトラブルシューティングをメインに行いました。さらに今年腹腔鏡下子宮体癌手術が婦人科悪性腫瘍に対する鏡視下手術として初の保険収載されたこともあり、実際に同術式を執刀している東北大学病院婦人科の新倉仁先生、永瀬智先生を講師として、東北大学病院で行われている腹腔鏡下リンパ節郭清術のポイントを解説し、受講生に実践してもらいました。

本セミナーは、休憩時間もそこそこで朝早くから夕方まで通して行いましたが、受講生から感想からは、トレーニング内容が充実しており、非常に満足度の高く、ニーズに近いものが提供できたのではないかと考えております。

産婦人科領域においては、保険適応を受けて悪性腫瘍に対する鏡視下手術はさらに発展すると考えられ、加えてロボット支援下手術が登場し急速に普及している今、若手だけでなく指導者にも求

められる技術が多種多様になってきています。しかし、臨床の場で安全性を担保しながら経験を積むにも限界があります。そのような中、本セミナーのような生体を使用してより実践的な環境を再現し、各個人が目的、意欲を持って、チャレンジングな技術や方法、新しいデバイスを体験できることは、実践で技術を磨くこと（On the job training）に匹敵するとても有益なトレーニングだと考えられます。

当教室では、腹腔鏡のスキルアップを望むすべての産婦人科医、そして産婦人科を目指す研修医に、より実践的で効率的なトレーニング環境を提供したいと考えており、今後も年2回から4回の開催を企画していく予定です。

最後に多くのサポートを頂いた良陵協議会、先端医療技術トレーニングセンター、動物実験施設に感謝申し上げます。

参加者からの感想（一部）

- 縫合について、コツを教えていただいたため、スムーズに結べるようになりました。
- 1日を通してドライボックスでの基礎的な事項から、まだ実際に体験した事のないリンパ節郭清など応用的な分野まで学ぶ事ができました。何より生体を利用しての実践であったため、細かい操作感覚なども体験でき、非常に有意義な機会でした。
- やることの難易度が徐々に上がっていくシステムがよかった。
- 解剖は人間とほぼ同じで、ブタと婦人科は相性が良いようであった。
- 骨盤リンパ節郭清など、今後必要になっていくが、ヒトでは血管損傷や神経損傷の恐れがあり、若手があまり経験できない技術を習得するという意味で、とても貴重な機会となりました。
- 自分の課題も数多くみつき、更に練習を積もうというモチベーションもあがりました。来年以降も是非参加させていただきたいと思います。

